

なら 植防ニュース

農薬安全使用研修会の開催

平成25年7月19日に、奈良県郡山総合庁舎会議室で農薬安全使用研修会が開催された。

「農薬の作用性を理解した効率的な防除について」講師は曾根信三郎氏（緑の安全推進協会派遣講師、バリエルックサイエンスKK）であった。

新農薬開発の経費は年々増加し、登録数は少なくなっている。農薬をグループごとに使い分け、耐性菌や抵抗性害虫、抵抗性雑草を出現させないようにする必要がある。農薬のグループ分けは、国際的な対策委員会がとりまとめた分類表が、殺虫剤はIRAC、殺菌剤はFRAC、除草剤はHRACからインターネットで公表されている。



一般社団法人奈良県植物防疫協会

〒634-0813 橿原市四条町88
奈良県農業総合センター内

Tel : 0744(22)8151

fax : 0744(22)8152(専用)

<http://www9.ocn.ne.jp/~nsyoku29>

目 次

◎農薬安全使用研修会	p.1
◎第28回報農会シンポジウム	p.2
◎第18回農林害虫研究会奈良大会	p.3
◎登録失効になった農薬（農薬検査所の失効農薬情報より）	p.4

「農薬の安全適正使用」講師は國本佳範（奈良県病害虫防除所）。農薬と家庭用殺虫剤の違いを説明し、農薬はラベルに記載されている使い方を守る必要がある。住宅地域での防除は、使用前に周知し、安全に配慮して使用する。ラベルに記載されている作物名には混同しやすいものがあるので注意する。例えば、トマトとミニトマト、キャベツと芽キャベツ、ブロッコリーと茎ブロッコリーは別の作物である。（植防ニュース第85号を参考にして下さい。）

質疑応答では、欧州で蜜蜂に影響があると考えられるイミダクロプリド（アドマイヤー）、クロチアニジン（ダントツ）、チアメトキサム（アクタラ）の3剤が2年間の使用禁止処置が取られており、今後の動向に注視する必要がある。

植物保護ハイビジョン 2013 —生産環境の変化と作物保護技術の再評価

植物防疫協会 岡山健夫

第28回報農会シンポジウムが9月26日に東京都で開催された。上路理事長から、農産物生産は、ゲリラ豪雨や高温により被害が危惧されているなか、食料自給率は39%と低下し、輸入農産物の高騰も懸念される。侵入外来生物の防除や、環境保全型農業、農業労働の軽減に応える防除技術が必要であり、植物保護技術の貢献が一層重要である、との挨拶があった。シンポジウムで話題提供された温湯浸漬法や育苗箱施薬の問題点、EUの農薬規制、花きの生産、輸入動向について要約を紹介する。

①宮城県古川農試の鈴木智貴氏は、近年増加しているイネ馬鹿苗病発生の現状と防除対策について報告された。環境保全型農業の推進に伴い、温湯消毒法や生物農薬が種籾消毒に用いられているが、馬鹿苗病が多発している。本病は収量や品質への直接的な影響が少ないため、農家の関心が薄い、種子生産に支障を来し、周辺の多発圃場対策が必要になっている。胞子飛散は多発圃場から100mを超えると急減するが、200mの範囲内に多発圃場がないことを採種の判断指標としている。このほか、保菌籾低減を目的とした採種圃場の薬剤散布や、化学農薬と同等の効果を得るために温湯浸漬法と生物農薬の体系処理による防除が検討されている。

②鹿児島県農業開発総合センターの井上栄明氏はウンカに対する育苗箱施薬の再評価について報告された。鹿児島県は東アジアから移動するウンカ類やコブノメイガが到達しやすい。育苗箱施薬は省力的技術であり、1994年以降普及し、ウンカ類に卓効を示した。しかし、東アジアにおけるトビイロウンカの多発生を背景に、2005年以

降坪枯れ被害が発生し、効力低下が懸念されている。発生面積は5割を超え、坪枯れ被害が珍しいものではなくなっている。今後、箱施薬と組み合わせて用いる本田後期防除に望ましい特性を持つ薬剤や効率的な施薬技術の開発が必要になっている。

③農薬工業界の横田篤宜氏は、EUにおける農薬事情について報告された。農薬はヒトの健康や環境に及ぼす可能性があるため、わが国では農薬の登録や販売および使用について農薬取締法で規制されている。EUでは従来91/414/EEC指令に従って、評価・登録が行われてきたが、ヒトの健康や環境に与える危険性の規制が農薬使用場面でできていなかったため、新たな農薬規則や指令が発効された。導入された考え方は、「疑わしきは罰すべし」とする予防原則に則った規制が進み、農業現場に必要な化学農薬の登録が削減されつつある。この結果、作物保護に必要な農薬がなくなり、食料生産に多大な影響を及ぼす可能性が危惧される。

④イングロ農材(株)の古橋友雄氏は、国内花きの生産動向と課題について話題提供された。菊生産は平成8年の20億本から平成24年には16億本に減少したが、国内需要を賄うために輸入が増加した。葬祭の平均費用は変わらず、件数は今後増加するので需要は堅調に推移する。一方、カーネーションは需要が変わらないが、国内生産が急減し、輸入が急増した。バラは国内生産、輸入ともに低下している。菊の国内生産維持には労力、生産経費減のために、芽無し性や低温性を備え、シェードが不要な新品種の開発や、効率的な病虫害防除技術が求められている。

第 18 回農林害虫研究会奈良大会
植物防疫協会 福井俊男

平成 25 年 7 月 11～12 日に奈良ロイヤルホテルにおいて、開催された。シンポジウムでは、奈良県の普及と研究が取り組んだ野菜、花卉栽培現場における害虫対策が紹介された。

○奈良県の害虫対策における研究と普及の連携 奈良県農業総合センター(國本佳範)

夏秋ナスのミナミキイロアザミウマ防除は多回数の薬剤散布でも防除が困難であった。薬剤散布作業を見直し、作業環境の改善に普及と共に取り組み、効率、健康、快適な防除を目指した。キクのナミハダニにも多回数の防除が行われており、抵抗性検定と感水紙による薬剤付着程度の評価、防除動作改善を行ってきた。現場の問題解決を図る普及が研究の原動力であるが、若手普及員はきわめて少なく、勉強する機会が少なくなっている。

○野菜産地における研究と普及の取り組み事例 奈良県農業総合センター(神川論)

ハウレンソウケナガコナダニの防除薬剤が少なく、普及と研究が共同で防除体系の確立と生産現場へ導入を行った。夏秋ナスに土着ヒメハナカメムシ類を活用して薬剤防除回数の削減を図る取り組みを生産者 4 団体で実施し、失敗事例を解析し改善に努めている。

○露地ギク栽培でのタバコガ類防除のための簡易ネット被覆の普及 奈良県農業総合センター(印田清秀)

露地ギク栽培では、タバコガ類の幼虫による茎頂部の食害が大きな問題になっている。農業総合センターで開発された簡易ネットを 2005 年より導入し、生産者の指摘を受けて改善した超簡易露地ネットハウスを 2007 年に開発し、126 棟(11.4ha)が導

入されている。ネットハウスの導入は、農薬経費と防除作業の削減だけでなく、収穫調整作業の省力化、ドリフトの軽減、環境負荷軽減などの効果もあり、増加している。今後は強風対策が課題である。

一般講演は 17 課題の報告があり、その一部を紹介する。

○夏秋ピーマン栽培におけるタバコガ類を対象とした防虫ネットの普及実態 大分県農林水研(上島慧里子)

防虫ネットの有効性を様々な形の簡易ハウスで評価した。ネットを張っていない圃場の食害果率が 30%以上で、腐敗果率が 10%以上であるが、防虫ネットの圃場はほとんど被害が認められなかった。防虫ネットの導入面積率は 2012 年に 40%以上になっている。

○ベイト剤によるハウレンソウケナガコナダニの防除 山口県農林総合技術研究所(本多善之)

ハウレンソウケナガコナダニの防除薬剤は少なく、難防除害虫になっている。土壤中に生息するコナダニは、ハウレンソウの発芽、生育時に土壤表面に移動するため、防除が難しい。アセタミプリドのベイト剤は食毒による防除効果が期待でき、本葉 2 葉期に表面撒布すると、防除効果が高かった。今後、農薬登録が行われる予定である。

○赤色防虫ネットによる葉ネギのアザミウマ類防除 京都府病虫害防除所(上山博)

赤色ネットをトンネル被覆し、周囲を高さ 1.8m のネットで囲うことにより防除効果が期待できる。適用作物に応じた被覆方法の開発が求められる。試験圃場の周辺では、生産者が自発的に赤色ネットを使用している様子が紹介された。

登録農薬失効情報（2013. 6. 1～9. 30）

農林水産消費安全技術センター農薬検査部の登録農薬失効情報より抜粋

登録番号	農薬の種類	農薬の名称	申請者名(略称)	失効日
	殺虫剤			
7058	MPP乳剤	サンケイバイジット乳剤	サンケイ	6/23
19987	クロルピリホス水和剤	ダーズバンDF	ダウケミカル	6/1
20014	ナミヒメハナカメムシ剤	オリスター	住友化学	7/29
21314	イミダクロプリド・エトキサゾール水和剤	花のもり100	住化グリーン	8/4
21338	クロマフェノジド・シラフルオフェン粉剤	三共マトリックジョーカー粉剤DL	三井化学	8/13
21343	ペルメトリン乳剤	花ベジタ100	住化グリーン	9/8
21999	イミダクロプリド・エトキサゾール水和剤	花のもり	住化グリーン	8/15
22002	磷酸第二鉄粒剤	三共ナメクジ退治	エムシー緑化	8/15
22012	シフルトリン液剤	ケムシムシAL	レイボ	9/19
	殺菌剤			
10576	マンゼブ水和剤	ジマンダイセン水和剤	ダウケミカル	6/25
10577	マンゼブ水和剤	グリーンダイセンM水和剤	ダウケミカル	6/12
13882	ジラム・チウラム水和剤	バルノックス水和剤	大内新興	7/9
15553	銅水和剤	ホクコーコサイドボルドー	北興化学	7/21
15554	銅水和剤	三共コサイドボルドー	三井化学	7/21
15558	銅水和剤	三明コサイドボルドー	三明ケミカル	7/21
16434	銅・プロシミドン水和剤	住化スクレタン水和剤	住友化学	7/10
17389	ペフラゾエート水和剤	ホクコーヘルシード水和剤	北興化学	9/27
17390	ペフラゾエート水和剤	UBEヘルシード水和剤	エステーエス	9/27
19020	イブコナゾール乳剤	テクリード乳剤	クレハ	6/13
19021	イブコナゾール乳剤	クマイテクリード乳剤	ケイアイ化学	6/13
19060	オキサリニック酸・ペフラゾエート水和剤	住化ヘルシードスターナフロアブル	住友化学	9/27
19061	オキサリニック酸・ペフラゾエート水和剤	UBEヘルシードスターナフロアブル	エステーエス	9/27
20025	シプロコナゾールくん煙剤	新富士アルトくん煙剤	新富士化成	8/31
20659	タラロマイセス フラバス水和剤	パイオトラスト水和剤	出光興産	7/12
21336	マンゼブ水和剤	三共ペンコゼブ顆粒水和剤	三井化学	8/13
	殺虫殺菌剤			
15520	MEP・フサライド水和剤	ホクコーラブサイドスミチオンゾル	北興化学	6/3
17347	エトフェンプロックス・カスガマイシン・フサライド水和剤	ホクコーカスラブレボン水和剤	北興化学	7/13
19019	テブフェノジド・バリダマイシン粉剤	ミミックバリダ粉剤DL	北興化学	6/13
20001	ブプロフェジン・MEP・フサライド・フルトラニル粉剤	アブロードスミモンラブF粉剤DL	日本農薬	7/17
20002	カルタップ・ブプロフェジン・フルトラニル粉剤	アブロードパダンモンカットF粉剤DL	日本農薬	7/17
20679	メトキシフェノジド・ペンシクロン粉剤	モンセレンランナー粉剤DL	バイエル	8/30
21351	エトフェンプロックス・ジクロシメット水和剤	デラウストレボンエア	三井化学	9/22
21984	アジムスルフロンのシハロホップブチル・テニルクロール・ペンシルフロンのメチル粒剤	トリデア1キロ粒剤36	北興化学	7/18
	除草剤			
19018	シメトリン・モリネート・MCPB粒剤	ゼネカ・マメットSM1キロ粒剤	協友ケイ	6/13
19036	イマズスルフロンのダイムロン・メフェナセット粒剤	ホクコーバトル1キロ粒剤	北興化学	6/30
19038	イマズスルフロンのダイムロン・メフェナセット粒剤	SDSバトル1キロ粒剤	エステーエス	6/30
20000	DCBN粒剤	タケダ園芸ベンポール粒剤	住友化学	7/7
20013	グリホサートイソプロピルアミン塩液剤	三共の草枯らし	三井化学	7/29
20033	グルホシネート液剤	ザッソージ	バイエル	9/25
20694	オキサジクロメホンのクロメプロップ・ピラゾスルフロンのエチル粒剤	JATレディプラスジャンボ	全農	9/13
21306	カルフェントラゾンエチル水和剤	石原タスクDF	石原バイオ	7/8
21310	シハロホップブチル・ピラゾスルフロンのエチル・フェントラザミド粒剤	トリプルスター1キロ粒剤	日産化学	8/4
21311	シハロホップブチル・ピラゾスルフロンのエチル・フェントラザミド粒剤	DASTトリプルスター1キロ粒剤	ダウケミカル	8/4
21350	オキサジクロメホンのクロメプロップ・ダイムロン・ペンシルフロンのメチル粒剤	JAMスターホームランドLジャンボ	全農	9/22
21980	オキサジアルギル・グルホシネート粉粒剤	ワルクサバイバイV微粒剤	バイエル	7/18
	農薬肥料			
16915	カルタップ複合肥料	くみあいエムシロン042	ジェイコム	7/9
17365	カルタップ複合肥料	くみあいエムシロンIBH5号	ジェイコム	7/25
19261	カルタップ複合肥料	くみあいエムシロン440	ジェイコム	7/9
	その他			
20690	イソプロチオラン水和剤	ツリーセーブ	住化グリーン	9/3
21341	アルミゲルア・ウワバルア・ダイアモルア・ビートアーミルア・リトルア剤	コンフェューザーV	信越化学	9/1
13286	タリウム粒剤	固形タリウムS「大塚」	大塚薬品	8/29
22726	展着剤	アルベロ	ナショナル	6/9